

暗夜に響く哀しきアリラン

シベリア回想記Ⅱ異邦人の友を憶うⅡ

栃木県 高橋 莊 吉

一、まえがき

かつて「朝風」第八号に「シベリアの吸血鬼」
或る抑留下級兵士の証言」を記したが、それとい
うのも、シベリア抑留第一年目すなわち昭和二十
（一九四五）年十月初旬、満州海林収容所から、
東京ダモイ（帰国）のかけ声を鵜呑みにして、浮
き浮きした祖国帰還の気持ちから乗車した貨物列
車は、一夜明けたら南下するどころか北に向かっ
て走っておる現実に夢は破られて、「希望」から
「絶望」の淵へと打ちのめされた思いであった。
そして窓外に展開する風景は、未だ見たことも
ない異国ロシアの寒々とした風景であり、心中に
去来する思いは、これから一体どのような前途が
我々を待ち受けておるのか、の憂いであった。

果して生きて祖国へ帰れるのか、内心「赤魔の
国」と教育を受けていただけに「人体実験」にで
も？ との不安があった。しかしながら、これ程
の大勢の日本人を全部殺害することはないであろ
う。とにかく集団から離れなければ当面は殺され
る事はあるまい、との一種の樂觀の気分はあった。

二、虜囚となりて

単調な貨車の中で何日過ごしたろうか。やがて
到着したその場所は、人跡もない大森林の中であ
った。囚人であろうか人影を見たが、彼らは森林
の中を伐採して、幕舎を幾つか点々と作っていた。
その幕舎の中は凍土である。凍土の上に寝るわ
けにはいかなない。与えられたノコギリと斧で付近
の樹を伐って、枝を剥ぎ丸太をつくり、それを地
面に横にしてデコボコした凍った丸太の床の上で、
シベリア大地の第一夜を休むことになった。

幕舎の中にはドラム缶が一つあって、僅かに暖
をとるのだが、煙突もない幕舎の中はもうもうた

る煙が充満して眠ることもできない。丸太の床の上に身体を横にしてまどろむだけであった。

それでも、「朝風」の同志である大浜勇氏が、サメの海に漂流した事やボルネオで蛇やエスカルゴを食った事を思えば天国かも知れない。

三、孤独流転

この幕舎に逗留するのも旬日にして部隊移動の日が続く。シベリア第一年目の冬は寒気が身に沁みた。行軍途中に小休止の号令がかかると、雪をかき分けて枯草や小枝を集めて雪道に焚火をするのだが、太い枝のない枯草は一瞬にしてメラメラと燃え尽きてしまう。それでも知覚が本能的に暖かい火を求めるのか、何回も小休止ごとにこのかない焚火を繰り返すのであった。そして夕暮れ近く一つの集落に到着し、これから先のトラック輸送を待機することになった。

一夜を明かし翌日、満州から来た部隊は次々と発進してゆくのだが、トラックが満員でどうして

も乗りきれない為、部隊でただ一人私が後続で来るよう命ぜられた。たった一人だけ、全く知らない別の部隊の傘下に入る事になったのだ。

宿営地の近くに囚人が住み、夜になると闇に乗じて日本人の所持品を略奪に来た。力自慢の古兵数人で棒を持って警備に当たった。

私は中隊長の前で自己紹介して、新参者として礼を尽くし仲間入りをしたのであったが、これからのような苛酷な運命が待ち受けているのか、神ならぬ身の知る由もなかった。

四、白川君との出会い

それから何回か宿営地を転々として結局到着した場所は河に添った森林地帯の中にある収容所であった。これが冬だと言うのに未完成のボロ宿舎で、零下三〇度以下の寒さの中で、土を溶かし丸太小屋の中の穴をふさぎ壁塗りをして、捕虜が越冬する家造りをする始末だ。たまたま私が臥床する場所の壁には、小さな穴があり、そこから隙間

風が入り込んだ。霜柱が立つような場所であった。

私の傍に朝鮮半島出身で特別幹部候補生として徴兵されて来た、十八歳の明眸白皙めいぼうはくせきな好青年、白川君がおった。どういうわけか以心伝心、お互いに気心が通じ合った。彼は異邦人ではあるが、育ちがよいとでも言うのか一種のすがすがしい雰囲気を持っておった。彼は初対面の私に対し「高橋さんは他の人と異なり何か温かい人間味を感じました」と語った。毎夜枕を並べて寝物語りに彼の生い立ちを聞いた。彼は村長の息子で、早く結婚し妻子もおるとの事だ。

シベリアでは捕虜規定によって一人一日三五〇グラムの黒パンの配給があり、糧秣受領の時そのように量って小隊人数に応じて配給される。だがその配給された黒パンを公平に分けるのが当然であるのに、糧秣担当の兵長が二階の暗がりの人目の届かぬところで切り、将校下士官そして古参兵には大きく、我々初年兵にはせいぜい二〇〇グラム位に小さく切って払い下げた。その分彼らは五

〇〇グラムのパンを食っておったのだ。一回ならまだしも、我々は毎夜毎夜この小さいパンの配給を受けたのである。

この話をするに「それは食い物の恨みだな」と冷笑してあざ笑う人間がおる。飽食美食にうつつを抜かしておる者にとつて、黒パンが小さかった話など、何か下品な話のように思うのである。米粒一つ・大豆一つも自由にならない飢餓状況のシベリアの捕虜にとつて、生きてゆく為に毎日配給の一片の黒パンは、生きる命の血肉なのだ。

五、黒パンと異邦人差別

シベリア捕虜の楽しみとは何であろう。「帰国できる話」と「食べる楽しみ」だ。唯一の楽しみたる毎日のパン配給が正当に支給されず、兵長に搾取配分されて、彼らの半分以下の支給とは、何たる残酷非情な仕打ちであろうか。同胞の血肉となる黒パンを権力でかすめ取る人間は吸血鬼でなくて何であろう。

白川君も私のように若いゆえに空腹を感じる青年だ。彼は私に「高橋さん、私がこのように差別迫害を受けるのは人種が朝鮮人であるからです」そして「高橋さん、私は一番楽しい筈の夕食のパンの配給の時間が一番悲しい気持ちになります」とも語ったのが、爾来五十年近くなるとも鮮明に想起される。私も全く同じ思いであった。

私は彼に対し慰め励ます意味から「白川君よ、決して君が朝鮮民族の為に迫害を受けるのではない。どうだ、私だって毎夜毎夜このようにして小さいパンの配給を受けておるではないか」と話して聞かせたが、鋭敏な彼は私の説得で納得する事は無かった。

パンの小さいのは同じでも、やはり日本人とは「上官の視線が違うのです」とも語った。このようにして彼は心の中のモヤモヤした鬱屈不満を私に語る事により幾分か発散できたのかも知れない。彼は私を異邦人の中でただ一人の味方と思っておったようであった。

六、「アリラン」哀し

地獄の生活シベリアにも正月を迎える事になった。収容所の中の宿舎は殺風景で、二段に板が張りめぐらされ、上級の階級の者は上段に（温かいから）、下段は下級兵士であった。当時の中隊長は秋田県出身で名を忘れたが中尉であった。

正月らしく演芸会をやることになった。昔の軍隊なら、炊事から御馳走が出るわ、酒保では何でも甘味品も求められて鼓腹撃壤し新年を祝うのであるが、シベリアに入り第一年目（昭和二十一年）の正月ほど淋しい苛酷な思いをした正月はない。それでもど自慢の人間はこの時ばかりと歌謡を披露した。中隊長も御機嫌であった。

そして一応ひと通り歌が出尽くしたと思われた時、誰からともなく「白川、何か朝鮮の歌をやれ」と大声で指名した者がおった。宿舎の中の灯火といえは勿論電気もない。白樺の皮を帯状に細長く切って灯芯としたその薄明かりで識別するのであるが、私の傍にいた白川君は小声で私に「歌いた

くないな」と嘆息するように言った。

しかし室内の空気は、有無を言わずに命令として、朝鮮人の青年白川君に、何か歌を唄わせないではおかないような威圧的な雰囲気の流れた。賢明な彼は、この際不意ながら歌わないと納まらないと察知したのであろう。やおら立ち上がって歌い出した。それは朝鮮の代表的な哀愁の民謡「アリラン」であった。

この日の夕食も彼は、お決まりのごとく、ひとかけらの小さな黒パンで淋しく済ませた筈だ。到底心から喜んで故郷の歌など唄う気持ちになれる筈がない。だが威圧強要され引きずり出されたのだ。

彼は歌った。アリランの哀調のメロディーは彼の美声によって一層もの哀しく薄暗い宿舎内に響き渡った。

「アリラン」

アリラン　アリラン　アラリヨ
アリラン越えて　ゆくところ
咲けよ花よ　わたしと
なみだおちた　峠に

アリラン　アリラン　アラリヨ
アリラン越えて　ゆくところ
誰が知ろう　私のこころ
ひとり旅ゆく　このこころ

アリラン　アリラン　アラリヨ
アリラン越えて　ゆくところ
空は青く　雲は白く
鳥はうたう　ふるさと

まさに歌詞にあるごとく、「誰が知ろう私の心」でありシベリアで元日本軍人の中で朝鮮人はたった一人であり「ひとり旅ゆくこの心」こそ、彼の

偽りない心境であつた事であろう。

時々白樺の皮を燃やす灯火が揺らめく彼の横顔が、このほのかな明かりに映し出される。彼の今の心境からして、心から喜んで歌える筈はない。この歌の心に我が身を没入させて歌つたのであるうか、哀調を帯びて暗夜のラーゲリに物悲しく響き渡る「アリランの歌声」――

七、シベリアの夜は更けて

あの日あの夜の情景は、今なお私の脳裏に焼きついて好青年白川君の面影と共に消ゆる事は無い。沈々と更けゆく中でシベリア元旦の夜、演芸会の思い出は、無事帰国してからも新年を迎えることに想起される。演芸会が終了して、小用に宿舎を出た時に見た、皚々の雪原を照らすシベリアの月光の凄絶さは、大気が澄んでおるからであらうか。そして、あの演芸会が催されてから数日の後になつて、彼は朝鮮人なるが故に突如として一人転属する事になつた。「お互いに元気で故郷に帰る

うよ」と、固い握手を交わして別れたのであつた。茫茫五十年の歲月の流れの中で、彼は果して私を思い出してくれるであらうか。生存しておられるなら、あの当時共に苦難迫害に耐え、小さい黒パンをかじつた日の事、そして人間は国境や民族を越えて友情には変わり無い事を語り合いたいものである。

歲月は流れても、若い青春時代の記憶は忘れることはない。白川君の事も決して忘却する事なく今日に至つた。

八、麗しきエピソード

昨年暮れの事である。「朝日」の声欄に、昔日本統治下の朝鮮で、愛情と情熱をもつて教育に打ち込んだ一日本人教師と朝鮮の教え子とが再会した感動的な記事が出ていた。当時の朝鮮の子弟達が、日本人教師への恩愛の情忘れがたく、探し求めた末ついに九州の一角に発見、朝鮮に招待して謝恩会を開催したという。

何たる麗わしきエピソード！ 人情紙のごとく、ましてや異邦人で、かつての抑圧者の国の教師の恩を忘れずその報恩の思いを国境を越えて実践なさるとは、世にも希有なる美談と言うべきであろう。

私は、この感動の思いと共に、この誠実な方々を通じて白川君の消息が判るやとの願いを込めて、「声」気付けにてお便りを差し上げたところ、次のごとき懇切なる御返書を頂戴した。

さすが六十年を経ても少年時代の恩師の薫陶を忘れることなく報恩の美挙を实践する人物だけあって、文面に溢れる切々の至情は深く心に迫るのがあった。歴史的に見ても儒教の教えの浸透したお国柄と思った。

「御返書」

思いがけない突然の御惠書をいただき感激に耐えません。美しい立派な文章、そして御達筆には驚きの外過去の両国の不幸な時代を正義感に訴え

たお言葉に厚く御礼を申し上げます。本当に有難うございます。

六十年ぶりに久米恩師をお迎えした拙い感想文をお読みになり、私にとつては当然の事でありまして、かくも激励下されかえってお恥かしい次第であります。ところが御好意のお便り朝日からの転送が遅れ、ようやく今日拝読しました。返事の遅れましたことお許しください。

顧みれば高橋様が申されるごとく日韓間には不幸な時代がありました。しかしさる十一月六、七両日に亘り慶州での日韓頂上会談では細川総理は率直なる過去史に対し深く反省と陳謝は勿論両国とも新政権で過去ばかりにこだわらず両国関係の新しい転機にすること、そして未来志向に幅広く語られましたことに感銘いたしました。

金泳三大統領は「両国の改革を成功させ新時代を開こう」と、細川総理は「国際社会に同伴関係を固く構築する」と日韓頂上基礎演説の一部の内容でありました。したがって正しい歴史認識の確

立と真情のお隣りになる努力をされるのです。之から日韓両国民はお互い改めて近い国であり善隣友好のきずなを固く結びましょう。

高橋様は戦中、満州・北支そして満州から敗戦後シベリアに丸四年抑留されたとの事、本当に御苦勞の程拝察申し上げます。私の事ではありますが、戦中は東京に留学し昭和二十年三月十日あの東京大空襲の際、目黒区役所近くの麦畑でようやく生命拾いを致しました。その年六月帰国し、以来国家公務員生活三十余年奉職し定年退職し今無職でおります。二男五女の父です。子供らは全部大学終了、結婚も終わり各自自立しソウルに五人、当地金州に二人の子は別々に住んでおります。今は妻と二人きりの生活であります。

東京は私の第二の故郷であり、去る年十一月に四十七年ぶりに大阪・奈良・京都・東京を観光に回って来ました。東京も全く変わってしまいました。しかし私はいつまでも日本が懐かしいのであります。

高橋様のお手紙に対し、余りにも感動致しましたので三十通もコピーして友人らに送ったところ、異口同音に立派な文章に驚き、相次ぎ称賛の電話を受けました。本当によかったのであります。句々切々、かつての苦境悲惨なシベリア收容所で白川君兵士との「戦友愛」「民族を超越した人類愛的真情」にはただただ感動の極みであります。

高橋様には韓国へ観光の機会はありませんでしょうか。お会いし過去のこと談笑できたらと思います。なんとかして白川君との再会が果たせたらと思えます。白川君の事につき部隊名や隊長名等と高橋様のお写真や経歴等ご一報戴きましたら幸いです。

とりあえず激励のお便り頂き答信に代えさせて戴きました。乱筆の失礼何卒お許し下さい。

右のごとき御返事を戴き恐縮した。人間愛に民族や国境はない好例と思う。

九、おわりに

入ソ第一年目の冬、下級兵士には一言の反発抗議も許される事なく、栄養失調と病苦の身に対し「動作緩慢だ」「たるんでる」として帯革ビンタが唸りをあげて打ち下ろされた。

数多くのシベリア体験記があるが、いずれもがソ連の「不当抑留行為」や「酷寒」と「飢え」そして「強制労働」への憎悪となっている。私が言わんとする日本人が日本人に対して軍階級制度の桎梏によって迫害を加えた事実に対し、目を向けて記したものは皆無である。

私は敢えて、このタブーに挑戦し、自らの体験を通じて、シベリア捕虜収容所内の実態を世人に訴えんとするものである。

拙いこの一文ではあるが、無念の涙を呑んでシベリアの雪の広野に朽ちた霊に対して、謹みて「鎮魂の譜」とする次第である。

【追補】望郷の歌（シベリア悲歌）

一、ここはシベリア北の国

飢えも寒さも労働も

耐えて生きよう いつの日か

帰るその日が 来るまでは

二、今日も労働 斧持って

吹雪の道を作業場へ

歩きながらも目に浮かぶ

故郷くくにで待ってるおふくろが

三、めぐる歳月としつき耐え抜いて

待った心を誰が知る

生きて還れるその日まで

夜毎に結ぶ故郷くくにの夢

平成六年二月二十八日作詞

高橋 莊吉（七十歳）

この歌は作詞家が観念上で作ったものでなく、自ら抑留四年の体験を通じて、シベリアの凍土の上で実感した心情そのものなのである。

上陸地 舞鶴
健康状態 普通

現在に至る

(栃木県 野沢 芳夫)

【執筆者の紹介】

大正十二年八月二十八日生

本籍 栃木県小山市乙女

現住所 右に同じ

引揚時本籍 栃木県下都賀郡間々田町

入隊年月日 昭和十九年八月一日

最後の部隊 満州第三七八部隊

入隊時の居所 栃木県下都賀郡間々田町

終戦時の居所 ハルピン駅構内

(八月十五日)

ソ連軍指揮に入った所 ハルピン郊外 孫家

ソ連領に入った期日 昭和二十年十月

抑留地名 アプロチン 建築に従事

引揚年月日 昭和二十四年七月二日

引揚船名 信濃丸